プロティノスプロティノスの
「自然、観照、一者について について」III-8-(30)
η' Περὶ φύσεως καὶ θεωρίας καὶ τοῦ ἑνός

一者については、「素材について8-4」(2)、「グノーシス派に対して」II-9-(33)」を参照

1
それでは、まじめな態度でよくよく前に、まず、たわむれに次のように語ってみることにしよう

「(この世界のものは)理性的な生きものだからであり、理性をもたない生きものも植物のピュシス(生命)も、また植物もはくくり大地も、すべての観照を求め、これをめざすべき目的としている。

そして、すべてはその本性にしたがった状態にある時に可能な限りその目的を達している。だが、それぞれの観照の仕方や目的の違いにはちがいがあって、或るものは真の目的で達しているが、別の或るものはその真も目的の横曲や横像を得ることで目的を達しているのであると

もしこのように語れば、はたして人はこの常識はずれのことばを役慣して聞いてくれるだろうか

これはわれわれ仲間うちで語られているのであるから、自分たちの考えをたわむれに述べることがあっても、別に危険なことにはならないであろう

それでは、はたしてわれわれもいま、たわむれながら観照しているのだろうか

11 そうなのだ、われわれはがんばりなさい。おとぼけたわむれている者はみな観照しているから、あるいはまじめな者たちも、観照を求めながら遊びたわむれているのである

καὶ θεωρίας
contemplation
観照、熟考などと訳される

そしておそらく、子供でも大人でも、恥みごとをしているからまじめなことをしているにこかかわりなく、だれもが観照をめざして、あるいはたわむれ、あるいはまじめなことしているのであって、行為はすべて、その開心を観照に向けているのである

ただし、必要に迫られた行為はその観照をむしろ外(感性界)に引き寄せる傾向が強いが、これに対して自然的な活動とわれわれが称しているものは、この傾向が弱い

だが、そうは言っても、自発的な活動も観照を求めて行われることには変わりはないのである

しかし、これらの外にいては後に述べることにして、いまは大地そのものや、樹木や植物一般に論点を移し、これらのものの行う観照とは何であるのか、

大地から作られ生まれるものもどのようにしての観照活動に関係づけられるのか、自然にはム象形成力や可能性を持たないと言われているのに、その自然がどうして自らのなかに観照(力)をもっているのか、

2
さて、たしかに、自然の制作活動には手も足も必要ではないし、他からもってきた道具を用いたり生まれながらにそなわっている器官を用いたりする必要もない

そこで必要とされるのは素材だけで、自然はこれに働きかけて形を与えるのである。これはおそらく、だれの目にも明らかなことだろう

しかし、われわれはさらに、この自然の制作活動からこの観照を聴外しなければならない。自然にはム象形成力や可能性を持たないと言われているのに、その自然がどうして自らのなかに観照(力)をもっているのか、

事実、人びとは横綱工師たちに注目いて、自然の造形と横綱工師たちのそれとは似たところがあると考えたとするなら、その横綱工師たちも、自分の作ろうとするものに外から色をもってきて加えようとはせず、色合いを出すことはできないのである

それに対した自然がなんらかの意味で観照(力)をもっているとして、その自然は自らの制作物をその観照を通じて、どのようにして作るのかという問題を検討していくことにしよう

しかしながら、両者はまったくは同じではない

なぜなら、両者を比較する人びとは、「横綱工のような技術に携わる者たちのばあいでさえ、彼ら自身のなかになにか動かずにとどまっているものがなければならず、彼らはその動かずにとどまっているものにしたがって制をふるい、自分たちの自身を観照に向けているのである」という理解してから、

自分たちの開心をこれと類似した自然の作品へともむけ、そのうえで、「自然の造形活動のばあいにも、そのうえ動かずにとどまっているのであるなければならず——そのうえ自然を用いて作るのではない——しかも、まったく動かずにとどまっているのであるなければならない」というように理解しなければならなかったからである

しかしながら、両者は比較できるのであって、

——なぜなら、両者は同じものであるのであり、

——なぜなら、両者は比較できるのであって、

というのも、たしかに、この自然の力は動かずにとどまっている部分と動く部分という二つの部分を必要とすることはないからであって

——なぜなら素材が動くのにあたり、自然の力のいかなる部分も動くことはないからである——

もしそうであるならば、自然の力の動く部分は第一の動者ではなくて、第一の動者ではなく、宇宙全体のなかの不動のものが第一の動者であることになるだろう

「だから、ロゴスこそ不動のものなのであって、自然はロゴスとは別のものであり、動くものなのであると、人は主張するかもしれない

「自然の或る部分は不動である」と主張するなら

結局はロゴスもそうであることになるだろう。

その部分はまたロゴスであることになるだろう

もしかしながら、もしよりよいなる考えをもっている人たちが、「自然は全体として動くものである」と主張するなら

というのも、事実、自然はエイドス(形相)でなければならず、素材と形相からなるものであるからではなくてはならないからである

なぜなら、どして自然に備わい素材とかあたい素材などというものが必要なのだろうか

つまり、素材は自然の下に横たわっているものであり、自然の制作の材料となるものであって、その素材が自然のそばにやってきて働かさや冷たさとたたらす…、

なぜなら、素材がつくとなるためには、ロゴスが実なければならないからである

エイドスである自然と形成原理であるロゴスとの関係は?

いや、むしろ、素材は質のないものであるが、ロゴスの形成的なカの作用を受けることによって、一定の質をもったものとなるのである

そして、この事実はまた、「動機物においてはロゴスが制作者であり、自然はロゴスである」ということの有力な証拠にもなるのであって、そのばあい、そのロゴスが自己の産物として別のロゴスを作り、そのロゴスが自らは動かずにとどまっていながら、基体になるもの(すなわち形態)を与えるのである

だが、これに対して、生命をもっているロゴスは——それは形態を作りだすロゴスと兄弟であり、自己自身もこれと同じカをもっているのであるが——生成の世界において作るのである

生命あるロゴスはロゴスを産出できる

(英語でもこの通りの表現なのであるが)形成原理であるロゴスが観照である、ということは、「観照」すると言う用法が成り立たないということか?(ロゴス)すると、という用法がないように

ではロゴスは生きている状態と死んだ状態があるのか?

3
では、その生命あるロゴスが作るとすれば、それがどして観照の一種と関連をもつことになるのだろうか

おそらく、もしそのロゴスが、自らは不動のままにとどまりながら作るのであれば、すなわち、自己自身のなかにとどまっているのであるが、自己自身のなかにとどまっているロゴスは、そのロゴス自身が観照であることになるであろう

このように言うのも(感性界のリアークシス(行為)はロゴスにしたがっているので、明らかにロゴスとは別だからである

もっともロゴスは、それ自体が行為と密接に関連していて、これを管理指導しているものであるから、行為ではありえないなのであるが…

それゆえ、もしそのロゴスが(自然としてのロゴス)が行為ではなく、ロゴスであれば、それは観照であることになるだろう

——なぜ、ロゴス全体のうちで、その末端のロゴスは(上位のロゴスの)観照から生まれたものであって、産出されたものなのであるから、その意味ではまた観照でもあるのである

これに対して、その末端のロゴスの上位のロゴスは全体として一つに分かれ、その一つは別の一つとは異なったものであり、自然なのである

自然ではなくて魂(宇宙霊)であって、他の一つつ自自然のロゴスであり、自然なのである

では、はたしてその(自然としての)ロゴスは身体も観照の産物なのだろうか、

むろん、そのとおりで、そのロゴスは完全に観照の産物なのである

ただし、そのロゴス自体も成る意味では自己自身を観照しているわけであって、それは、このロゴスが観照の結果として産出されたものであり、或るものが観照活動を行った結果、生まれたものだからなのである

たとえば、人間の魂は自己自身の観照をとおし、で知性を観照することになる

上位のものの観照から生まれたものは、自己自身に対する観照を通じて上位のものを観照することになる

15 すると、自然は或る種の生命であり制作するものであるが、なぜ、その観照はロゴスに基づいていないのだろうか

自然は(すべてを自己自身のものとして)所有しており、所有しているからこそ作りもするのである

そもそも「考察する」ということは、(「考察の対象となるものを」)まだ所有していないことを意味するからだろうか

ただし私は、「自己自身のなかにもっているものについて考察を行う」という意味で、「ロゴスに基づく」ということを使っているのであるが…

14 だが、その自然(としてのロゴス)は、どのようにして観照するのだろうか

自然がロゴスに基づく観照を行うのではないこと は、場からである

それゆえ、自然にとっては制作がその本質をなしており、自然のもつ制作力と観照の本質内容とは、同一の広がりをもっているのである

18 しかし、自然は観照である とともに観照の対象である

なぜなら、自然はロゴスだからである。それゆえ自然は、観照であり観照の対象であるロゴスであるという、そのことからもの可る題りにおいて、まだ制作しもするのである

したがって、自然による制作は、われわれに観照として示されているのである

4
なお、もし誰かが自然にその制作の目的を問い、自然が問い手に耳を傾けて答える気になったとしたら、おそらく次のように言うだろう

というのも、自然の制作は観照の結果だからであって、自然は観照として の自己の立場を保持しながら他のいかなることにもかかわらず、ただ観照することによって制作するのである

「私にそんなことを尋ねるべきではありませんでした、私が口を開けていつも黙っているように、あなた自身も黙って理解しなければならなかったのです。

では、何を理解すればよかったのでしょうか、それは、次のことなのです。すなわち、生じているものはすべて私が黙ってテアーマ(観たもの)であり、私の本性にしたがって生じた観照の対象であるということ、この種の観照の仕方は、私の観照の産物であり、それなのです。

そして、ちょうど幾何学者たちが(知性界の形を)観たから図形を描くように、私の観る産物は観照の対象を作るのです。

しかし、私は図形を描くのではありません。私が観照している時に、私の観照の像きからいやはゴミ箱ちらるといいんして、物体の線がまれてくるのです。

なお、私の母や私を生んだ者たちの身に起こったことが、私にも起こっているのです。つまり、私の母や私を生んだ者たちも観照から生まれたのです。私の誕生も彼らの負っているのでして、

彼らが何らかの行為をしたからではなく、大いなるロゴスである彼らが自分自身を観照している時に、わたしが生まれたのです」。

では、これらのことは、われわれに何を語ろうとしているのだろうか、それは次のことである

すなわち、「自然と呼ばれているのは実は球であって、自分よりよりと優れた生命力をもった魂から生まれたものなのである。

すなわち、自然は自らのあることにとどまり、自己を静かな状態に保って、いわば自己自身を知覚しているのであって、この意識つまり自己知覚によって自分につくべきの生命力に可能な範囲内で知り、もは や他のものの手めないで、美しく輝きに満ちた観照のを産出した」という ことなのである

そして、自然は自己自身のなかで静かに観照を行うのであって、その観照は上位のものに向けられるのであって、そうあるべきものに向けられるのである。

23 なお、もし人が自然に或る種の理解もしくは知覚を認めようとしても、それは、われわれが他の生きもののばあいに知覚もしくは理解を、自己めていろ人のそれに比べたばあいのようなものであろう

すなわち、「自然と呼ばれているものは、実は魂であって、自分よりよりと優れた生命力をもった魂から生まれたものなのである。

23 なお、もし人が自然に或る種の理解もしくは知覚を認めようとしても、それは、われわれが他の生きもののばあいに知覚もしくは理解を、自己めていろ人のそれに比べたばあいのようなものであろう

もしろぐっすり眠りこんでいる人の感覚もしくは理解を、自己めていろ人のそれに比べたばあいのようなものであろう

なぜなら、自然は自分のなかに現れてきた自分の観照の、を観照しながら、静かにとどまっているからである

というのも、自然は自己自身とかつ自己自身と交わりながらとどまっているのだし、自己自身が観照の対象だからである

それに、この自然の観照は自らに対して、沒照とするのである

というのも、この自然の観照は別に、観るという点でもっとはっきりと観照があり、自然の観照はその観照の影だからである

だからこそ、自然の観照から生まれたものは、あらゆる点で弱きものである

なぜなら、観照が弱いと、弱い観ものを作るからである

というのは、人間のばあいでも観照するカが弱い時には、観照やロゴスの影としての行為を行うからである

つまりこのばあいには、魂が弱くてその観照の像きが後にとって充分ではないので、彼らは観ものを充分に把握することはできず、

したがってまたそれによって満たされることもないのであるが、それでも後ろは観ものを見るとを求めて行為に移るのであって、結局は知性で観ることのできなかったものを(肉体の目で)見ることになるのである

かくして、わわわわはいたるところで、制作や行為が弱い形の観照から、あるいは観照の結果であるのを見出すであろう。すなわち、もはや観照とは言えないほどに、それ自身は観照の結果であるのである

37 どこかへ、彼らが何かを制作する時には、彼ら自身もその対象を見ようとして制作するのであるし、それにまた彼らの対象が可能な限り行為に限られた枠に、は、他の人びとにそれを観たり、それに気付いたりすることを求めるからである

自分の行為を超えたところに、自分の作品よりすぐれたものを観ることができれば、その制作(もしくは行為)は観照の結果なのである

なぜなら、真なるものを観ることができるのに、何よりもまずその真なるものの影に向かうような人がいるのだろうか

このことについては、より恩興な子供たちがまたその証人となってくれるだろう。すなわち、彼らは学んだり観照したりするカがないので、技術や中庸を求めて堕ちていくのである

5
しかし、われわれは自然について、生成がどのような意味で観照であるのか話してきたのだから、次に、この自然の上に位する魂のカに歩を勧め、魂の観照と手を杯ち結ぶ中間項の登場、それに、魂の知識を得た時に味わう陶酔の測しゃかや充足などが、観ものとなりきっている魂に別の観ものを作らせるのはなぜか、ということを話していくことにしよう

さて、魂の第一の部分、すなわち、知世界で常に真実性に満たされ、その光りを受けて輝いている部分は知性界にと至っているが、別の部分、すなわち、第一の部分の真実在の直接の分取を通じて分取している部分は、生命から出た生命として顕現く(下の世界に向かって)進んでいく

というのも、生命の活動はいたるところに到達しているのであって、

とはいえ、むろん、魂は(下方に)向かうにあたっては、自己の上位の部分を、それを残したところ(知性界)にとどめるのである

そこで、もし魂の活動がいたるところに到達していて、及ばぬところはなく、しかもなおそなたは、それはならないとしたら、また、先にあるものは後のものと常に異なっているなければならないとしたら、

それにまた、活動は観照の行為から生まれるが、まだ行為はないとしたら

魂のそれぞれの段階の活動には強弱の差はあるけれども、その活動はすべて観照でなければならないことになる

したがって、観照に基づく行為であると思われているものは、実際にはもっと弱い観照であることになるだろう

かくして、可視的で外的な観照もしくは行為はいわばいちばんの下位であるから、最初の生命がこのである

27 なお、観照を行うのはあくまでも魂であり、(魂は観照を行って)下位のものを作るのであって

要するに、観照が観照をするのである

しかしながら、むろん、それはあらゆるもの(魂)に同じあり方で存在しているわけではない

だから、(「パイドロス」に述べられている魂の)収穫は二頭の馬に自分の見たものを分け与えるこの馬

人間の魂について の話になっている

6
しつみると、行為は観照とのこの観照の対象をめざしていることになるだろう

したがって、何らかの行為をしている者たちにとっても、観照がその行為の目的であって、それはたとえば、まっすぐに進んでは手にいれることのできなかったものを、まわり道をして手にいれようとするのに似ているとみなすべきである

それにまたこのことは、人びとの行為が善きものをめざしていることからも明らかなのであって、

彼らが善きものをめざして行動するのは、善きものを彼らの外に実現するためでもなければ、その善きものを通して得られる善きものの一を手にいれるためなのである

だが、人びとは、その善きものを どこで手にいれることになるのだろうか

魂のなかで手にいれることになるのである

さて、このようにして人びとは、行為といわれる道をしながら、ふたたび観照のもとにもどってくることになった

そして、この確信が明確であればあるほど、観照は、この世界の魂の影としてのあり方をなしている

認識の主体は対象を明確に認識するのであるほど、認識対象との一体化の傾向を強めていくのである

つまり、魂はロゴスなのであるから、人が魂のなかで手にするものは、沒照はロゴスと同様の何ものでもないわけである

そしてこのロゴスは、魂の真深くに横たわっていればいるほど、それだけ沒照せる度合も大きく、魂を満たす度合いもますくなるのである

すなわち、この時の魂はロゴスに満たされているから平静な状態を保ち、何も求めはしないのであって、このような状態のもとでの観照は、すでにその対象を得ていると確信しているのであって、魂の美深くに横たわっているのである

——今やわわわれは、まじめな態度で問題にとりくまなければならない段階にきているのであるが——

つまり認識の主体と客体が二つにわかれている時には、そのこつはそれぞれ別ものであるだろう

したがって、両者はいわば並置されており、魂はまだこの一対のものを近親の関係のもとで結合させていなかったのであって、

だから、このロゴスは魂の外にあり(ふみなす)べきである

学ぶ者の魂がこれと一体となり、「このロゴスはもともと自分に固有なのだ」ということを知るようにしむけ ればならないのである

たとえば魂のなかにあるロゴスが何もしていない時に、そのようなことがおこるのである

ただし、それは絶対的な一者ではなく、人はそれを通って絶対的な一者に到るのであるが、その絶対的な一者は、もはや他のいかなるものにも連関することはないのである

しかしながら、人は植物の一者

——これはまた(植物の根に)静かにとどまっている源でもあるのだ——

動物の一者、魂の一者、この世界の一者などと把握するならば、そのそれぞれのばあいに最も有力かつ尊きものを把握することになるだろう

事実、この一者は、これを源とする諸実在のいかなるものでもないのであって、存在でも実体でも生命でもなく、これに ついて述べることのできることは一つもないのであるが、

しかし、これらすべてを超えている ような、そのようなものである

——ただしそれは、人は植物の一者

だが、もし真実在の一者つまり真実在の源、泉、そして真実在を産み出す力、これを把握するならば、われわれはたとまちにして(その実在性に)疑念をいだき、それにいかなるものでもないのではなからうか、と思うようになるのではなからうか

その存在を問わずに、それを把握するという方法は、哲学の故意ではないのか?

そこで、もし君が「有る」ということを抜きにしてこれを把握すれば、君は驚きに満たされることになるだろう

「有る」ということを抜きにしてこれを把握すれば、君は驚きに満たされることになるだろう

帰依であって、哲学的考察からの跳躍である

そして、これに身を投じてそのなかに憩い、直感的にそれを理解し、それが源となからその後に生じることにならった諸実在を通じてそれの偉大さを知り、ますますそのこの理解を深めていくことになるだろう

11
さらにまた、次のようにも考えてみよう。すなわち、「知性は或る種の視覚であり、現に観ている視覚なのであるから、現に活動していている能力であると

もしこのようにおいてあるとすれば、知性には善がある。

とにかく、それは見る前には、一つだったから であるが、だから一つがこのことなり、二つがつくりになったのである

ところが、視覚のばあいには、感覚対象によって充足されれ、一種の完成の状態に達するのに対して、知性という視覚のばあいには、これを充足させるのは善なのである

それゆえ、知性は善を得ると直に似たものとなり、善によって充足されるのであって、それは、善から知性に(やって)きた形相が、知性を善に似たものとするからである

かくして、善は、知性が善の方に眼差しを向けている時に、知性のうえに広がっている分の足跡を、知性の所有物として与えたのであるから、知性のなかには(善に対する)欲求があり、知性は絶えず欲し求め、絶えず得ているのであるが、

善は何も求めず——いっさい、善の求めるものが何があるだろうか——何もが得ていないのである

だから善は、自己以外のいかなるものも所有していないのである

——これらのものの なかにはそれ自体で明らかなものもあれば、われわれの議論が(その正当性を)思いおこさせたものもあるだろう

——ただ、これらのものの なかにはそれ自体で明らかなものもあれば、われわれの議論が(その正当性を)思いおこさせたものもあるだろう

——ただ、これらのものの なかにはそれ自体で明らかなものもあれば、われわれの議論が(その正当性を)思いおこさせたものもあるだろう

というのも、次のことも、すなわち、

「すべてのものが自らの源をめざす目的として いるなら、第一義的な諸存在は観照をその本質としているのであるから、それは自分のすべてのものを観照の対象となることを目的として作るべきである」

ということも、明らかである

なぜなら、生命あるものが度ならばあいに、彼ら生命あるものの本能的に可能な限りで出産へと導くものこそ彼らのなかにあるロゴスであり、この出産という努力は(ロゴスの活動である)観照のエネルゲイア(働き)であって、

それはまた多くの形すなわち多くの観ものを作りだしてすべての観照の対象となっているものたちを産出するのであって、

なお、誤りとは、事物の生成における誤りも行為における誤りも、とにも観照している者の観照の対象からのずれである

だからまた、劣悪な技術者は模倣と形を作る者と同種の人物ともみなされるのである

それにまた、愛しているA は形を観る人、熱心に形を追求する人びとの間に数えられるのである

8
以上の件については、右のとおりであるとしておこう

他方、観照が自然から魂へ、そして魂から知性へと上位の観照へと移行し、この移行の度に観照と観照を行うものとの関係も緊密化と一体化の傾向を強め、

賢者のすぐれた魂の段階では、認識の客体は主体と二向一化の方向をたどり

——というのも、このばあいの認識の客体は知性の方を向いているからであるが——

かくして知性の段階にいたると、いまや明らかに、認識の主体と客体は一つとなるのである

ただし、このの「一つ」というとは、最高なる魂のばあいのように、両者が緊密な関係にあるように思われているのではない

本質において、すなわち、「有ること」と認知することは同じであるという意味で、「一つと言われているのである

というのは、そこには中間なかったのであるからである

もしそうでなければ、そうえさらに、もはや異性の分別をつけることのできない別の或るものがあることになるだろう

それゆえ、知性の段階にあるものは、認識の主体と客体が一体をなしているものであるが、

この主体と客体が一体をなしているものは、生きている観照なのであって、他のもののなかにある観ものとは異なっているのである

それゆえ、或る種の観ものつまりイエーマ(直知内容)は生きているのではなければならないのであるが、

なぜなら、他のものなかにある観ものは他のものゆえに生きているのであって、それ自身で生きているのではないからである

というのも、ここにあげられたいろいろな制約のついた生も、或る意味でノエーシス(知性活動)がからである

ただし、これらの生の一つは植物的な知性活動であり、別の一つは感覚的な知性活動であって、いま一つは精神的な知性活動であるが…

では、それらの生は、どうして知性活動なのだろうか、それらがロゴスだからである

そして生はすべて或る意味で知性活動なのであるが、生にも濃淡だったものがあるのであって、知性活動にも濃淡的なものがあるのである

そして、他の生よりも明澄な生はもの生よりも、第一の根元的な知性とは一つなのである

だから、生はすべてこの知性活動の部類に属するとともに、知性活動でもある ことになるのである

それゆえ、第一の根元的な生は第一の知性活動であり、第二の生は第二の知性活動であって、末端の生は末端の知性活動だという ことになる

しかしながら、おそらく、人びとは生の差異について は疑をするかもれないが、知性活動の差異については は明瞭である。生とはいったい何かという問題を少しも探究していないから、

だが、われわれは少なくとも、「それ」ごろか、われわれの議論は、存在するものはすべて観照の部産物であるという ことを明示している」という、すでに明らかになった事実を示す必要があるだろう

だから、もし、もっともっと高なる生は知性活動にふさわしくもあるであり、この生ともっとも真なる知性活動は同じものであるならば、もっとも真なる知性活動は生きていることになる、

或る生は知性活動であるとは認めても、別の生については、これが知性活動であることを全面的に否定しようとするであろう

観照もそれにふさわしい観ものも、どちらにも生きており、生であって、両者は一体をなしているこ とになるだろう

29 では、もしその両者が一つになっているのなら、どうしてそのうちのものが、今度は多となるのだろうか

つまり、それは一なるものを観照するばあいでも、一つのものとして観照するわけではないのである

——もしそうであれば、それは知性とはならないだろう——

いや、むしろそれは、一つのものとして観照を始めたのであるが、観照を始めた時の情態にとどまらなかったのであって、

いわばぼかいつぶされている者」のように、多となっておりながら気付かず、すべてを持ちつつ として自己自身を広げたのである

というのも、このばあいは知性、<自己自身を広げて、形、面、円周、中心、半径となり、また或る部分は上となり、或る部分は下となっている円>のごとものの となっているからである

——知性にとっては、こんなことを望まなかったほうが、どんなによかったことだろうか、こんなことを望まなかったほうが、第二位のもののとったのだ——

つまり、<そこへ>は、<そこへ>は使っているのである

というのも、<そこへ>と<そこから>とは、<そこへ>と<そこから>も同じような意味をもっているのではないからである

なお、別の見方をすれば、知性は或る特定の一つのものの知性ではなく、普遍的なものでもあるのである

そして、普遍的なものであるから、またすべてのものであるのである

——もしそうでなければ、知性は知性でないものから成り立っていて、<あらゆるものを機成要素として、それらから知性となるのを持っている。答は集めのかたまりのようなもの>であることになるだろう——

それゆえ、知性が普遍的なものであり、すべてのものの知性であれば、知性の部分もすべてをもち、すべてのものであるのであって、

だから、知性は、この意味では無限なものであるのであって、もし或るものの知性から出ているとしても、そのことによって減少が見られることはないのである

だから知性は、この意味では無限なものであるのであって、もし或るものの知性から出ているとしても、そのことによって減少が見られることはないのである

すなわち、知性から出ていったものも、それ自体がまたすべてであるのであって、から減少はしない、その源の知性も、いろいろな部分の色成ではないのだから減少することはないのである

9
さて、たしかに、知性は右のような特性をもったものなのである

それは、なによりもまず、「多は一より後のものである」という理由に基づいているのである

——われわれのこれまでの論及も、まさにこの知性を前提したものを明らかにするために行われてきたのである——

それは、知性は数であるが、数や数の部類に属するものの源となっているものは、ほんこうの意味での一でなければならないのである

すなわち、この知性は、直知于会ものであるとともに直知されるものであるから、(一である)同時にであることとなる

だが、もし知性が二ならば、われわれはその二より先にあるものを把握しなければならないことになる

では、それは何だろうか、単一な知性だろうか

いや、そうではない。知性にはすべて直知されるものがしっかり比較がついていて、対をなしているのである

なぜなら、自然の観照は自らに対して観ている者は「有る」ものであって、

したがって、もしは んとうの一には直知されるものが結びついて対をなしているようなことがあってはならないとする、そののは知性でもないことになるだろう

だから、もしそれが知性ではなくて、二から自由なものであってはならないとすると、それはこれらのこより先にあるものとして、知性のかなたに超越したものでなければならないことになるだろう

では、その知性のかなたに超越したものの直知されるものであるが、それでも後ろは観ものを見るとを求めて行為に移るのであって、結局は知性で観ることのできなかったものを(肉体の目で)見ることになるのである

11 言うまでもなく、直知されるものはまた知性についつ いて、対をなしているのである。それでも後ろは観ものを見るとを求めて行為に移るのであって、結局は知性で観ることのできなかったものを(肉体の目で)見ることになるのである

そのばあいでも、それは知性は直知作用をそれらのものの、いずれかだろう

直知作用を行わないものであれば、それは自己自身さえも知らないことになるだろう

そこで、直知作用を行うものは、それは知性であることになる、

とすると、そんなものが、そうして問いのだろうか

わわわわれが、「それは善なるもので、もっとも単一なものである」と主張し、その主張の真実であるとしても、何に基づいてそういう考えを述べているのか、その根拠をもなたれば、明確な事実を述べていることにはならないだろう

というのも、さらに、わわわわは知性を通じてそれ以外のものを知り、知性を知ることができるのの知性によるからであるとすると、この知性の本性を超えているものを把握するには、どんな直観によればよいのだろうか

どうすればできるのか、その方法を示す姿のある者に対してわわわわは、「わわわわのなかにある、これと似ているものによって」と、答えるであろう

ἐκείθεν = ἐκ τοῦ νοητοῦ とするスリーマンの見解をとらず、ἐκείθεν(そこから)を ὁποῦοὺν(どこ)を受けているのと解する

受け取りつつ受け取らないか、あるいは受け取るか受け取らないかのどちらか?

というのは、わわわわの側にも、この超越者に関するものがあるからである

いや(むしろ、それを分有するとのできるものにとっては、そのものは、それはどこにでもあるのである

つまり、君はどこいいあって、この普遍的な現存者を把握しうるものをそばだてることにこそ、そこからそれを得るわけである

ちなみに、荒野に声が満ちているとしてみよう。いや、その声は荒野を満たしているばかりでなく、人びとにもとどいているとしよう

君はその荒野のどこにいようと、耳をそばだてたならば、そこでその声のすべてを受け取ることになるだろう。別の意味では、そのすべてを受け取ることにはならないだろう

超越的普遍者のばあいも、これに似ているのである

では、われわれが知性をそばだてて受け取るものは、何だろうか

もしろ、知性は後に身を退くようにして、いまは自分自身を自分の後ろにあるものに引き寄 し

直知対象(τὸ νοητόν・ノエートン)としての自分を第一に引き寄すということ、つまり知性が自らの本質をなす知性活動をやめること

かしこで、あの超越的な一者を観えようとする ならば、あらゆる点で知性でなくならなければならない

——というのも、知性は二つの面をもっているからだが—

だから、もし知性が、発出できっと、万有を明確なかたちで所有し、演然と光っぱに所有しているのではないとすれば

——というのも、そうではれは、万有を不完全で区別のないかたちで所有していることになるからだが——

知性は知性以外の或るものに由来するのではなければならず、その或るものは、(万有の)発出の過程にあるのではなくて、その発出の源であり、生命の源であり知性の源であるとともに万有の源でもあることになるだろう

つまり、万有は源ではなくて、万有が源から出てきたのであるが、その源はもはや万有でもなければ、その万有のものいずれかーつのものでもないのであって、

だからこそ、それは万有を産んだのであり、多ではなく、多の源たりうるのである

42 というのは、産むものは産まれたものより、常により単一なものだからである。したがって、もしその万有の源となっているものが知性を産んだのなら、それは知性よりも単一なものでなければならないことになるだろう

そこで、一者は万有のすべてが集められてつ一つになったものであるとすると、一者は万有より後にあることになるだろう

他方、一者は万有より先にあるとすると、万有は一者とは別であり、一者は万有とは別にあることになるだろう

だが、これに対して、一者も万有も同時に存在しているとすると、一者は万有の源ではないことになるだろう

だが、これに対して、一者も万有も同時に存在しているとすると、一者は万有の源ではないことになるだろう

49 だが、一者は万有の源であるのであって、万有より先にあるのではなくて、万有より先にあるのであって、そうあってこそ、万有も一者につづいて存在しうることになるのである

しかし、もしそうなら、一者は万有のそれぞれ一つ一つにあるのか、それとも、それらすべてが集められて一つになったものなのか、いずれかであることになるだろう

しかし、もしそうなら、一者は万有のそれぞれ一つ一つにあるのか、それとも、それらすべてが集められて一つになったものなのか、いずれかであることになるだろう

51 しかしながら、他方、一者が万有のそれぞれにあるとするとすると、まず、それぞれのものはどんなものだろうと、みな互いに同じものであることになるだろう。次に、万有は一体なし、そこに同の区別もないことになるだろう

10
では、一者とは何だろうか、それは、万有を産出するこころの可能力であって、この力がなければ万有もないし、知性も第一位の普遍的な生命とはなりえないであろう

つまり、万有であるところの生命の活動は第一位のものではなく、それ自身がいわば泉を源とする川の流れのようなものなのである

それに、この自然の観照は自らに対して沒照とする のである

というのも、この自然の観照は別に、観るという点でもっとはっきりと観照があり、自然の観照はその観照の影だからである

だからこそ、自然の観照から生まれたものは、あらゆる点で弱きものである

なぜなら、観照が弱いと、弱い観ものを作るからである

というのは、人間のばあいでも観照するカが弱い時には、観照やロゴスの影としての行為を行うからである

つまりこのばあいには、魂が弱くてその観照の像きが後にとって充分ではないので、彼らは観ものを充分に把握することはできず、

したがってまたそれによって満たされることもないのであるが、それでも後ろは観ものを見るとを求めて行為に移るのであって、結局は知性で観ることのできなかったものを(肉体の目で)見ることになるのである

かくして、わわわわはいたるところで、制作や行為が弱い形の観照から、あるいは観照の結果であるのを見出すであろう。すなわち、もはや観照とは言えないほどに、それ自身は観照の結果であるのである

なぜなら、真なるものを観ることができるのに、何よりもまずその真なるものの影に向かうような人がいるのだろうか

このことについては、より恩興な子供たちがまたその証人となってくれるだろう。すなわち、彼らは学んだり観照したりするカがないので、技術や中庸を求めて堕ちていくのである

しかしながら、人は植物の一者

——これはまた(植物の根に)静かにとどまっている源でもあるのだ——

動物の一者、魂の一者、この世界の一者などと把握するならば、そのそれぞれのばあいに最も有力かつ尊きものを把握することになるだろう

事実、この一者は、これを源とする諸実在のいかなるものでもないのであって、存在でも実体でも生命でもなく、これに ついて述べることのできることは一つもないのであるが、

しかし、これらすべてを超えている ような、そのようなものである

——ただしそれは、人は植物の一者

だが、もし真実在の一者つまり真実在の源、泉、そして真実在を産み出す力、これを把握するならば、われわれはたちまちにして(その実在性に)疑念をいだき、それにいかなるものでもないのではなからうか、と思うようになるのではなからうか

その存在を問わずに、それを把握するという方法は、哲学の故意ではないのか?

そこで、もし君が「有る」ということを抜きにしてこれを把握すれば、君は驚きに満たされることになるだろう

「有る」ということを抜きにしてこれを把握すれば、君は驚きに満たされることになるだろう

帰依であって、哲学的考察からの跳躍である

そして、これに身を投じてそのなかに憩い、直感的にそれを理解し、それが源となからその後に生じることにならった諸実在を通じてそれの偉大さを知り、ますますそのこの理解を深めていくことになるだろう

11
さらにまた、次のようにも考えてみよう。すなわち、「知性は或る種の視覚であり、現に観ている視覚なのであるから、現に活動していている能力であると

もしこのようにおいてあるとすれば、知性には善がある。

とにかく、それは見る前には、一つだったから であるが、だから一つがこのことなり、二つがつくりになったのである

ところが、視覚のばあいには、感覚対象によって充足されれ、一種の完成の状態に達するのに対して、知性という視覚のばあいには、これを充足させるのは善なのである

それゆえ、知性は善を得ると直に似たものとなり、善によって充足されるのであって、それは、善から知性に(やって)きた形相が、知性を善に似たものとするからである

かくして、善は、知性が善の方に眼差しを向けている時に、知性のうえに広がっている分の足跡を、知性の所有物として与えたのであるから、知性のなかには(善に対する)欲求があり、知性は絶えず欲し求め、絶えず得ているのであるが、

善は何も求めず——いっさい、善の求めるものが何があるだろう——何もが得ていないのである

だから善は、自己以外のいかなるものも所有していないのである

——これらのものの なかにはそれ自体で明らかなものもあれば、われわれの議論が(その正当性を)思いおこさせたものもあるだろう

——ただ、これらのものの なかにはそれ自体で明らかなものもあれば、われわれの議論が(その正当性を)思いおこさせたものもあるだろう

——ただ、これらのものの なかにはそれ自体で明らかなものもあれば、われわれの議論が(その正当性を)思いおこさせたものもあるだろう

というのも、次のことも、すなわち、

「すべてのものが自らの源をめざす目的として いるなら、第一義的な諸存在は観照をその本質としているのであるから、それは自分のすべてのものを観照の対象となることを目的として作るべきである」

ということも、明らかである

なぜなら、生命あるものが度ならばあいに、彼ら生命あるものの本能的に可能な限りで出産へと導くものこそ彼らのなかにあるロゴスであり、この出産という努力は(ロゴスの活動である)観照のエネルゲイア(働き)であって、

それはまた多くの形すなわち多くの観ものを作りだしてすべての観照の対象となっているものたちを産出するのであって、

なお、誤りとは、事物の生成における誤りも行為における誤りも、とにも観照している者の観照の対象からのずれである

だからまた、劣悪な技術者は模倣と形を作る者と同種の人物ともみなされるのである

それにまた、愛しているA は形を観る人、熱心に形を追求する人びとの間に数えられるのである

8
以上の件については、右のとおりであるとしておこう

他方、観照が自然から魂へ、そして魂から知性へと上位の観照へと移行し、この移行の度に観照と観照を行うものとの関係も緊密化と一体化の傾向を強め、

賢者のすぐれた魂の段階では、認識の客体は主体と二向一化の方向をたどり

——というのも、このばあいの認識の客体は知性の方を向いているからであるが——

かくして知性の段階にいたると、いまや明らかに、認識の主体と客体は一つとなるのである

ただし、このの「一つ」というとは、最高なる魂のばあいのように、両者が緊密な関係にあるように思われているのではない

本質において、すなわち、「有ること」と認知することは同じであるという意味で、「一つと言われているのである

というのは、そこには中間なかったのであるからである

もしそうでなければ、そうえさらに、もはや異性の分別をつけることのできない別の或るものがあることになるだろう

それゆえ、知性の段階にあるものは、認識の主体と客体が一体をなしているものであって、他のもののなかにある観ものとは異なっているのである

この主体と客体が一体をなしているものは、生きている観照なのであって、他のもののなかにある観ものとは異なっているのである

それゆえ、或る種の観ものつまりイエーマ(直知内容)は生きているのではなければならないのであって、それは観照であることになるだろう

なぜなら、他のものなかにある観ものは他のものゆえに生きているのであって、それ自身で生きているのではないからである

というのも、ここにあげられたいろいろな制約のついた生も、或る意味でノエーシス(知性活動)がからである

ただし、これらの生の一つは精神的な知性活動であり、別の一つは感覚的な知性活動であって、いま一つは植物的な知性活動であるが…

では、それらの生は、どうして知性活動なのだろうか、それらがロゴスだからである

そして生はすべて或る意味で知性活動なのであるが、生にも濃淡だったものがあるのであって、知性活動にも濃淡的なものがあるのである

そして、他の生よりも明澄な生はもの生よりも、第一の根元的な知性とは一つなのである

だから、生はすべてこの知性活動の部類に属するとともに、知性活動でもある ことになるのである

それゆえ、第一の根元的な生は第一の知性活動であり、第二の生は第二の知性活動であって、末端の生は末端の知性活動だという ことになる

しかしながら、おそらく、人びとは生の差異について は疑をするかもれないが、知性活動の差異については は明瞭である。生とはいったい何かという問題を少しも探究していないから、

だが、われわれは少な